上代語における係助詞カの振る舞い
―係助詞ヤとの比較を通して―

堀尾　香代子

キーワード：係助詞カの振る舞い、ヤへの推移、係り結びの質的変容、相関性と指示性の希薄化

0　はじめに

上代は疑問文の主流的形式の一つとして、カによる係り結びが盛行する[1]。これはα．疑問語を伴うものと、β．疑問語を伴わないものに大別される。αでは「疑問語＋カ」の如くカは普通疑問語の下に現れるが、この事実は、「ヤ＋疑問語」との統語的位置の対照的な有り様等から、従来疑問点指示性の強さとの関連性が説かれている[2]。一方、カが疑問文の最も重要な標識（marker）となるβでは、既に上代にカからヤへの推移現象が見られ、中古に至ってヤがカを駆逐したことは早く澤瀉（1941）、佐伯（1963）に指摘がある[3]。しかし、筆者の観察によれば、この現象は全ての環境下に等しく認められるわけではなく、構文構造上一定の制約が存するようである。そこで本稿では、上代文献を資料として疑問文βにおける係助詞カの振る舞いをヤとの比較を通して観察するとともに、カからヤへの推移現象と構文環境との関連性についても言及したい[4]。

1　係助詞カの構文的振る舞い

表１は，万葉集より得られた係助詞カ・ヤによる疑問文βを係りと結びの成分の関係により整理したものである。（＊はカ・ヤの統語的位置を示す。）

〈表１〉

類型	構文	か	や
Ⅰ 句的成分＊述語	体言述語句＊述語	13　(5.3%)	2　(1.0%)
	条件句＊述語	67 (27.5%)	44 (21.8%)
Ⅱ 連用成分＊述語	時＊述語	32 (13.1%)	8　(4.0%)
	数詞＊述語	11　(4.5%)	3　(1.5%)
	連用修飾語＊述語	11　(4.5%)	41 (20.2%)
	所＊述語	5　(2.0%)	4　(2.0%)
Ⅲ 述語分割型		60 (24.6%)	32 (15.8%)
Ⅳ 格成分＊述語	主格＊述語	25 (10.2%)	45 (22.3%)
	対格＊述語	10　(4.1%)	9　(4.5%)
	その他	10　(4.1%)	14　(6.9%)
合計		244　(100%)	202　(100%)

※　連用修飾語は〈副詞，連用形，連用の「～と・～て・～つつ」〉等，狭義のそれに限定した。

係助詞カをめぐる統語機能には、概ね次の４種が観察される。

（Ⅰ）一事態としての意義的独立性が高い句と句の間に介入し句的関係を形成する。

（Ⅱ）連用成分と文末述語との間に介入し連用修飾関係に与る。

（Ⅲ）複合的な述語の構成要素間に割って入り述語内部で働く。

（Ⅳ）格成分と文末述語との間に介入し格関係を形成する。

係助詞カのうち最も使用率が高いのは、類型Ⅰの80例で、係助詞カ全体の約33％を占める。逆に、最も使用率が低いのは、類型Ⅳの45例で約18％に留まる。一方、係助詞ヤでは、係助詞カで最も使用率の低い類型Ⅳが、係助詞ヤ全体の約34％（68例）と最も高い使用率を示しており、両助詞は、類型ごとに必ずしも同様の分布状況を示さない。以下、各類型における係助詞カの振る舞いをヤのそれと比較しつつ具体的に見ていきたい。

2　類型Ⅰにみるカの振る舞い

類型Ⅰは、述語を備える前句と後句の間にカが介入するタイプである。この類型は上代の係助詞カに最も多用される構文類型である。この類型には〈体言述語句＊述語〉と〈条件句＊述語〉の２種の構文が見える。次は〈体言述語句＊述語〉の例である。

(1) 玉梓の妹は玉𩸞（カモ）　あしひきの清き山辺に撒けば散りぬる（巻7、1415番）

(2) 玉梓の妹は花可（カ）毛（モ）　あしひきのこの山陰に撒けば失せぬる（巻7、1416番）

(3) 秋の夜の月疑（カ）意（モ）君は　雲隠りしましく見ねばここだ恋しき（巻10、2299番）

(4) 古に恋ふる鳥鴨（カモ）　ゆづるはの御井の上より鳴き渡り行く（巻1、111番、弓削皇子）

(5) うまさけを三輪の祝が斎ふ杉手触れし罪歟（カ）　君に逢ひかたき（巻4、712番、丹波大女娘子）

(6) 紅に深く染みにし心可（カ）母（モ）　奈良の都に年の経ぬべき（巻6、1044番）

(7) 池神の力士舞可（カ）母（モ）　白鷺の桙啄ひ持ちて飛び渡るらむ（巻16、3831番）

(8) 玉藻よし　讃岐の国は　国から加（カ）　見れども飽かぬ　神から加（カ）　ここだ貴き…（巻2、220番、柿本人麻呂）

(9) …み吉野の　秋津の宮は　神から香（カ）　貴くあるらむ　国から鹿（カ）　見が欲しからむ…（巻6、907番、笠金村）

(10) 神から加（カ）　見が欲しからむ　み吉野の滝の河内は見れど飽かぬかも（巻6、910番、笠金村）

(11) …およづれ加（カ）　我が聞きつる　たはことか　我が聞きつるも…（巻3、420番、丹生王）

カには、文末に位置して体言もしくは体言相当句に付き、述部の形成要素となる終助詞と、文中で様々な成分に付き、文末を連体形で結ぶ係助詞としての用法がある。〈体言述語句＊述語〉のうち、前部が「～は～体言＋カ（モ）」の形式による（1）～（3）[5]は、これを挿入句的に捉え、文法的には一応ここで終結した一文と見做す立場と、「～体言＋カモ」を「～体言＋ナレヤ」や「～体言＋

ナレバヤ」等の疑問条件句と同意と捉え、一首を結句の連体形を結びとする係り結び文と見る立場等がある[6]。これらの例は、後部の連体形句に体験的事柄等の自明的事態を、前部の体言述語句にその事態が生起する原因理由を推測的に述べる点で、意味構造上「理由（原因）―帰結（結果）」の関係を表す疑問条件表現に準じる意味的関係が認められる。しかし、両件の間には条件関係にあることを示す文法的徴表は介在しておらず、文法的にはやはり論理的判断文「～は～体言＋カ（モ）」に、喚体的な性格を帯びる連体形止めの文が後置する二文構成の歌と捉えるべきかと思われる。一般に連体形止めは詠嘆を表すための語法と言われる。全体を一つの句的体言として一体的に纏め上げて強い詠嘆や感動を表出する終止法であるが、このような語法にカが前置する例は、この他にも（4）～（10）のような例が見える[7]。これらは前部「～体言＋カ（モ）」で連体形終止文の表す体験的事態や自明的事柄の原因理由を推し量る点で、(1) ～ (3) と同様の意味構造による。係助詞カが、本来述語構成的な終助詞から発達した可能性が高いことは既に諸家の説くところであるが[8]、このような例は終助詞カと係助詞カの連絡過程の一端を示唆する例群と見做される[9]。同じく（11）の前部「およづれか」も下文との文法的関係が不明瞭で、前部はむしろ一種の感嘆文（独立句）としての色彩が濃い。一方、〈体言述語句＊述語〉にヤが使用された例は、万葉第４期の次の１例が見えるのみで、『評釋萬葉集』（佐佐木信綱、1953 年、六興出版社）が「古人の成句を借用したり模倣したりして、獨自性が稀薄である。」と評するように、(8) の人麻呂や (9) (10) の金村等の古歌の歌句を借用しつつ、カをヤに置換していることは明らかである。

（12）…二上山は　春花の　咲ける盛りに　秋の葉の　にほへる時に　出で立ちて　振り放け見れば　神から夜（ヤ）　そこば貴き　山から夜（ヤ）　見が欲しからむ…（巻17、3985番、大伴家持）

選択疑問（「Ａカ―、Ｂカ―」）はカに特有の構文であるが、(12) はこのような形式的保証を背後に、カの意味機能を温存したままカがヤへと交替した例であり、〈体言述語句＊述語〉自体は本来ヤに空白域の構文形式であろう。

〈条件句＋カ＋述語〉の例は67例（係助詞カ全体の約28％）が見える。表２はこれらを形式ごとに整理したものである。

〈表２〉

構文			数	
順接	確定	已然形＋カ―。	26(38.8%)	62 (92.5%)
		～みカ―。	17(25.4%)	
		～とカ―。	10(14.9%)	
		已然形＋ばカ―。	8(11.9%)	
		～ゆゑカ―。	1 (1.5%)	
	仮定	未然形＋ばカ―。	5 (7.5%)	5(7.5%)
合計			67 (100%)	

この表からは形式ごとにカの使用状況に偏在傾向のあることがわかる。この構文類型は67例中62例（約93％）までが順接確定条件での使用例である。他は順接仮定条件に５例（約８％）が確認できるにすぎず、逆接条件での使用例は皆無である[10]。係助詞カと各条件表現との組み合わせの可否を簡略に示すと表３のようになる。

〈表３〉

	順接	逆接
確定条件	○	×
仮定条件	△	×

順接確定条件と係助詞カとの組み合わせのうち、最多は「已然形＋カ―」の26例（「条件句＋カ―」全体の約39％）、次いで「～みカ―」17例（約25％）で、上代語に固有の語法との組み合わせによるこの２形式が62例中43例（約64％）を占める。一方、条件的な前提句を承ける「～とカ―」や、接続助詞を伴う「已然形＋ばカ―」は、各10例（約15％）、８例（約12％）と先の２形式の使用数を下回る。順接確定条件表現の内部においても諸形式間に使用数の多寡が認められることがわかる。

3　接続助詞を伴わない形式におけるカの振る舞い

ミ語法は前句が形容詞（及び形容詞型活用の助動詞）を述語とする場合に語幹に接尾語ミを伴う語法である。また、已然形単独用法は一般に接続助詞バ・ド等を伴う既定条件法の古格とされ、前句が動詞述語句の場合に用いられる。ともに接続助詞なしに由因性の関係を表せる上代文献に特有の語法である。

(13) 天雲の影さへ見ゆる　こもりくの泊瀬の川の　浦無み可（カ）船の寄り来ぬ　磯無み可（カ）海人も釣せぬ　よしゑやし浦は無くとも　よしゑやし磯は無くとも　沖つ浪きよく漕入り来　海人の釣船（歌経標式、真本、170～174行）

(14) 卯の花の過ぎば惜しみ香（カ）ほととぎす雨間も置かずこゆ鳴き渡る（巻8、1491番、大伴家持）

(15) うちなびく春を近み加（カ）ぬばたまの今夜の月夜霞みたるらむ（巻20、4489番、甘南備伊香）

(16) 蘆辺より満ち来る潮のいやましに思へ歟（カ）君が忘れかねつる（巻4、617番、山口女王）

(17) みをつくし心尽くして思へ鴨（カモ）ここにももとな夢にし見ゆる（巻12、3162番）

ミ語法・已然形句と連体形句との間にカが介入する例は、(13)～(17)に見るようにいずれも両項の意義内容に明瞭な因果関係が看取され、カは後句事態の原因としての前句事態を一文中の疑問の焦点として指示していることが明確である。集中、接続助詞や係助詞を伴わない音仮名表記による無助詞の已然形は20例弱確認される。これら無助詞の已然形句は比較的明瞭な因果関係の条件句を構成する例を中心とするが、(18)の如く逆接的関係の条件句を構成する例や、(19)の如く事態を並列的に提示する連用中止法のような例等が見え、後句との意義関係の有り様は必ずしも一義的ではない。

(18) 大舟を荒海に漕ぎ出で八舟多気（たけ）我が見し児らがまみは著しも（巻7、1266番、古歌集）

(19) …娘子らが　娘子さびすと　韓玉を　手本に巻かし　よち子らと　手携はりて　遊びけむ時の盛りを　留みかね　周具斯野利都礼（すぐしやりつれ）　蜷の腸　か黒き髪に　何時の間か　霜の降りけむ　紅の面の上に　いづくゆか　皺が来りし　…（巻5、804番、山上憶良）

佐々木(2003)が、無助詞の已然形は「もともと複数の既定の事態を並列的に描写・提示する際に用いられ」、それが「「ば」「ど／ども」を伴うことによって以下の表現との接続関係を明確に表示しうるものになった」(301頁）と説くように、無助詞の已然形句は、後句との相関性や意味的関係が接続助詞を添着する場合ほど緊密かつ明確ではない。いわば順逆の関係を未分化に抱え込みつつ、緩やかに後句と相関している。このような已然形句と後句との間に介入するカは、両句を相関する統語機能を担うとともに、両句間の意味関係の有り方にも深く関与する。順接確定条件表現の構文的特徴に関しては、情報論的な観点から、一文における文焦点(疑問表現の場合は疑問点)が必然確定は前件に、偶然確定は後件にあることが指摘されている[11]。論理関係の非分析的な表現形式「已然形＋カ―」では、係助詞カの句的相関力と優れた疑問点指示性が、裸の已然形句と不可分に連携することにより、因果の関係性を表す疑問条件表現を形成している。

このような事情はミ語法による接続関係についてもほぼ同様である。ミ語法は「形容詞の連用形として動詞的な活用語尾が芽生え、未発達に終わった[12]」ものと言われる。一般に他の句と相関する形で用いられ、その関係性は因由性の関係を中心とするが、(20)の如く連用中止法のように後の語句と並列的に用いる例や、(21)のように後続動詞の修飾語となる例等があり、前後件間の意味的関係は必ずしも一義的でない。

(20) …明日香の　古き都は　山高三（やまたかみ）　川とほしろし…（巻3、324番、山部赤人）

(21) …望月の　益目頬染（いやめづしみ）　思ほしし　君と時どき　出でまして　遊びたまひし…（巻2、196番、柿本人麻呂）

ミ語法と後句の間に介入する係助詞カは、因由性の疑問条件表現たることを積極的に示す統語的役割を果たしているものと思われる。

一方、確定条件の前後句間に係助詞ヤが介入する例も集中に42例程存するが、これらは36例（「条件句＋ヤ―」全体の約82％）までが反語を表す「已然形＋ヤ―」の形式により、他は「～とヤ―」に４例、「～みヤ―」に２例(うち１例は「哉」字表記)が見えるのみで、反語表現以外の純粋な疑問条件表現の確例は僅少である[13]。

(22) 橡の袷の衣裏にせば我強ひめ八方（ヤモ）君が来まさぬ（巻12、2965番）

(23) 見むと言はば否と言はめ也（ヤ）梅の花散り過ぐるまで君が来まさぬ（巻20、4497番、中臣清麻呂）

(24) 又（マタ）為（オモ）大（ホ）臣（マヘツキミ）弖（トシテ）仕（ツカヘ）奉（マツラ）部留（ヘル）臣（オミ）多知乃（タチノ）子（コ）等（ドモ）男（オノコ）波（ハ）随（ツカヘ）仕（マツル）奉（サフ）状（ニシ）弖（テ）種（タガ）種（ヒテ）々（クサグサ）治（ヲサメ）賜（タマヒ）比ツ礼等母（ツレドモ）女（メノコ）波（ハ）不（ヲ）治（サメ）賜（タマハズ）。是（コレ）以（ヲ）所（モテ）念（オモホ）波（セバ）男（ヲノコ）能未（ノミ）父（チチ）名負（ナオヒテ）弖（テ）女（メノコ）波（ハ）伊婆（イハ）礼奴（レヌ）物（モノ）尓（ニ）阿礼夜（アレヤ）立（タチ）双（ナラビ）仕（ツカヘ）奉（マツル）自（シ）理（コトワリ）在（アリ）止奈母（トナモ）念（オモホ）須（ス）。（宣命第13詔天平勝宝元年４月朔、聖武天皇、28頁）

(22) ～ (24) のような「已然形＋ヤ―」は、形式上ヤが已然形句と後句とを相関しているかにも見えるが、両句の間にはカの例に見るような因果性の関係は希薄で、むしろ意味的には一旦そこで切れているようにも見受けられる。集中には終助詞ヤが 239 例見えるが、うち 190 例（約 80％）までが「～已然形＋ヤ」の反語形式 [14] であること等から、「已然形＋ヤ―」はむしろ文末用法からの展開過程を解明する必要があるが、已然形単独用法における係助詞カ・ヤの棲み分けは、用法差を反映する形態示唆であり、少なくとも前後句が一文として論理的にしっかりと結びついた「已然形＋カ―」と「已然形＋ヤ―」との間には、係り結びとしての実質的意義に相応の差異がある。接続助詞を伴わない形式では、意義的独立性の高い事態同士をカが相関しつつ、両句の意味関係の有り方を決定づける統語標識として働くことで、前句に疑問点を置く疑問条件表現を形成している。カ･ヤが用法差の形態指標となるこのような構文形式下では、カ･ヤの棲み分けは保持されやすく、ヤがカの領域へ入り込むこともほとんどない。

4　接続助詞を伴う形式におけるカの振る舞い

接続助詞バを伴う「已然形＋ばカ―」の例は、「已然形＋カ―」の三分の一以下の使用数に留まる。上代語の係助詞カは、接続助詞バにより前後句間の論理関係を明示化する新形よりも、論理関係の非分析的な旧形に用いられやすいという特徴を認める。このような傾向は、接続助詞バの未発達や一般化の遅れのみによっては必ずしも説明しきれない側面を持つ。小路（1988）の調査によれば、集中「已然形＋バ」は942例を数える。上代では順接の既定条件法は既にバを伴うのが一般的であり、裸の已然形は係助詞との併用において特にその優位性を示す。このような共起傾向を構文構造の観点より捉えるならば、係り句と結び句との相関形成を係助詞に依存しない新形の如き構文環境下では、係助詞が両句の間に位置する機能的必然性は旧形に比して低い。

疑問文に限らず、上代の順接確定条件表現では、接続助詞による接続構文と係助詞による係り結び構文が本来的に共起しにくい傾向にある[15]。その一因は、接続助詞と係助詞の統語的役割が部分的に重複するため、両助詞を重ねて用いる(共起する)有用性が低い点にあるのではないかと推察される。森重(1966)が「已然形＋カ―」の係助詞カは「前句における「ば」的なものをしばしば自身に含みこむとともに係りとなり、後句に結ぶ」と説くように、少なくとも上代の係助詞カは、接続助詞バの機能の一部を兼務することがあった。

上代の「已然形＋ば」は必然確定・偶然確定・恒常確定等、未だ多義的な接続的意味を併せ持つが、(25)～(28)に見るように、「已然形＋ばカ―」は先の２形式同様必然確定への偏りが顕著である。カによる統語的位置付けが両句の意味関係の有り方に強い影響力を及ぼしている事実が見て取れる。上代にはこの形式によるヤの例（「已然形＋ばヤ―」）は皆無である。

(25) 新榮の神の御酒を飲げと言ひけば賀母（カモ）よ我が醉ひにけむ（常陸風土記歌謡、6番）

（26）我が背子にまたは逢はじかと思へ墓（バカ）今朝の別れのすべなかりつる（巻4、540番、高田女王）
（27）秋萩は雁に逢はじと言へれば香（カ）声を聞きては花に散りぬる（巻10、2126番）
（28）思ひつつ寝れば可（カ）もとなぬばたまの一夜も落ちず夢にし見ゆる（巻15、3738番、中臣宅守）

条件的前提句を形成する助詞「と」を承ける（29）（30）のような「～とカ―」も10例見られるが、この構文は万葉第４期になると「～終止形。～とカ。」の倒置表現にほぼ限られるようになり、ヤは係り結びの崩壊したそのような環境下でカの位置へ積極的に参入しているようである。

（29）佐野山に打つや斧音の遠かども寝もと可（カ）児ろが面に見えつる（巻14、3473番）
（30）筑紫道の荒磯の玉藻刈ると鴨（カモ）君が久しく待つに来まさぬ（巻12、3206番）

奈良期から平安期にかけてミ語法や已然形単独用法は衰退していくが、それに伴いカは二句一文構造型の係り結び構文から退き、疑問条件表現は衰勢に向かう[16]。疑問の係助詞の衰退に関しては、既に中世に確立した主格助詞ガの勢力拡大との関連性が指摘されているが[17]、奈良期から平安期には、論理関係を明示する接続構文の卓越に伴い、句的相関を形成する場から係助詞カの後退が始まっている。これは疑問文における接続関係表示の卓越が、係り結び的断続関係による二句一文構造型疑問文の衰退を促した可能性を示唆する。上代に疑問条件表現の傍流として観察される係助詞カと接続助詞バの併用例は、上代から中古にかけて二句一文構造型の疑問文が係り結び的断続関係を中心とする構文構造から、接続関係表示を基本とする構文へと移行する過渡的な例と見做される。

5　類型Ⅱにみるカの振る舞い

類型Ⅱは連用成分と述語との間にカが介入するタイプである。この類型は59例中32例までが「時＋カ―」の形式による。特に次のような「今日・明日・今・今夜」等の単純な時点名詞を承ける例が32例中30例とその大部分を占める。

（31）我が背子が使ひ来むかと出立のこの松原を今日香（カ）過ぎなむ（巻9、1674番）
（32）年にありて今香（カ）まくらむぬばたまの夜霧隠れる遠妻の手を（巻10、2035番）
（33）ひさかたの天の川瀬に舟浮けて今夜可（カ）君が我がり来まさむ（巻8、1519番、山上憶良）

これらの例は30例中29例までが未実現乃至未確認の事柄であることを表す助動詞「む」「らむ」「まし」を結びとするが、事態の実現そのものよりは、むしろそれがいつ実現するのかを疑問視している。一方、このような単純な時点名詞を承ける係助詞ヤは、後期万葉歌に僅か３例（全て「今日（の日）ヤ―」）が見えるのみであることから、上代では「時点名詞＊―」の形式は専らカの領域であったと考えられる。殊に「今日カ―」には17例と纏った用例数があるが、(31)「今日カ過ぎなむ」と(34)「今日ヤ過ぎなむ」等同表現の存在は、集中に僅かに見える「時点名詞＋ヤ―」がカの類型表現からの移行例であることの証左となる。

(34) 国遠き道の長手をおぼほしく今日夜(ヤ)過ぎなむ言問ひもなく（巻 5、884 番、麻多陽春）

「数詞＋カ―」は11例全てが「ひとりカ―」の例で、うち９例が（35）のような「ひとりカ(モ)寝(ら)む」の表現形式による。「ひとりヤ―」も３例が見えるが、うち２例は「哉」字表記であり、確例は（36）の１例のみである。これも（35）の「ひとりカ寝らむ」→（36）「ひとりヤ寝らむ」の如く、カの成句的表現を踏襲し、カをヤに置換した可能性が高いであろう[18]。

(35) 流らふるつま吹く風の寒き夜に我が背の君はひとり香(カ)寝らむ（巻1、59番、誉謝女王）

(36) 荒磯やに生ふる玉藻のうちなびきひとり夜(ヤ)寝らむ我を待ちかねて（巻14、3562番）

一方、「連用修飾語＋カ―」はカが11例に対しヤが41例と、ヤがカの使用数を大幅に上回る。係助詞カ・ヤそれぞれに占める割合も、カは全体の約4.5％に留まるのに対し、ヤは全体の約20％と、当構文形式はカよりもヤの使用が活発である。殊にヤには「副詞＋ヤ―」に25例と纏った使用例が見える他、カには例がない「形容詞・形容動詞・形容詞型活用の助動詞の連用形＋ヤ―」「～てヤ―」等、述語の状況を具体化する修飾語句を承ける形式も各７例、５例見える。カにも「副詞＋カ―」「わがごとカ―」等が若干例見えるが、この形式でのカの使用はヤに比し活発とは言えない。一方、「連用修飾語＊述語」の中でも、引用構文を承ける「～と＊―」にはカ・ヤ両者に例が見えるが、例えば（37）の人麻呂歌には原案系統に属すると目される一本歌の注記が見え、これが(38)の天平８年遣新羅使人等歌の「所に当りて誦詠する古歌」にそのまま収められている。遣新羅使人等が同じ瀬戸内航路を旅した古人人麻呂の古歌を誦詠し、(37)「海人とカ見らむ」→(38)「海人とヤ見らむ」とカをヤに置き換えたものと思われる。

(37) 荒たへの藤江の浦にすずき釣る海人と香(カ)見らむ旅行く我を（巻3、252番、柿本人麻呂）

一本云はく、白たへの藤江の浦にいざりする

(38) 白たへの藤江の浦にいざりする海人と也(ヤ)見らむ旅行く我を（巻15、3607番、遣新羅使人）

類型Ⅱは、「時＊述語」「数詞＊述語」「～と＊述語」等にはカ、「副詞＊述語」「形容詞・形容動詞の連用形＊述語」等にはヤのように、形式に一定の棲み分け傾向が認められる。しばしば指摘があるように、間投助詞に由来すると目されるヤは、元来疑問点を指示する機能がカに比して希薄で、そのため一首の疑問点が前項に存することの明確な構文環境下では、ヤの使用は抑制的である。両助詞の機能的役割の差は類型Ⅱにおけるこのような形式ごとの偏在傾向にも、反映していると考えられる。

6　類型Ⅲにみるカの振る舞い

複合的な述語の構成要素間にカが割って入る類型Ⅲは60例確認される。表４はそれらを類似表現ごとに整理したものである。（ ）内は２例以上の用例数である。

〈表４〉

類似表現		数
～ずカ(モ)～む	見ずカなりなむ（2）、見ずカ過ぐさむ、見えずカモあらむ、逢はずカモあらむ（2）、取らずカモあらむ、離れずカ鳴かむ、知らずカあるらむ、成らずカモあらむ、寝ずカなりなむ	11
～にカ(モ)あらむ(まし)	恋ふれにカあらむ（2）、斎へにカあらむ、長みにカあらむ、妹にカモあらむ（2）、愛子にカあらむ、のどにカあらまし、なばりにカ、霜ぐもりすとにカあらむ	10
散りカ(モ)～	散りカ過ぎなむ（4）、散りカモ来る（2）、散りカ過ぐらむ	7
～つつカ～む(らむ)	燃えつつカあらむ（2）、恋ひつつカ来む、聞きつつカあらむ、見つつカ～越ゆらむ	5
消カモ死なまし	消カモ死なまし(4)	4
待ち(に)カ(モ)～	待ちカ恋ふらむ（2）、待ちカモ恋ひむ、待ちにカ待たむ	4
～カ行かむ	別れカ行かむ（2）、迎へカ行かむ、浮れカ行かむ	4
恋ひカモ～む	恋ひカモ痩せむ、恋ひカモ居らむ、恋ひカモ行かむ	3
～てカ～らむ	鳴きてカ来らむ（2）、恋ひてカ寝らむ	3
～寝カ(モ)～	旅寝カモする、真寝カ渡らむ、朝寝カ寝けむ	3
咲きカ（モ）～	咲きカ散るらむ、咲きカモ散る	2
その他	相ひカ別れむ、死にカモ死なむ、靡きカ寝らむ、やどりカせまし	4
合計		60

カが述語内部で働くこのタイプは、複合的な述語の前項要素への疑問点指示性が総じて緩やかで、前後二項の相関という統語的役割も複合形式のもと希薄化している。表現形式にもある程度のパターン化が見られるなか、特に(39)～(47)のような半ば慣用化した連語的辞的成分にカが介入するタイプでの係助詞カの相関性と指示性は著しく薄弱で、係り結びとしての実質的構文意義はほぼ消失している。

(39) 明日香川しがらみ渡し塞かませば流るる水ものどに賀(カ)あらまし（巻2、197番、柿本人麻呂）

(40) 間なく恋ふれに可(カ)あらむ草枕旅なる君が夢にし見ゆる（巻4、621番、佐伯東人の妻）

(41) 霜曇りすとに可(カ)あるらむひさかたの夜渡る月の見えなく思へば（巻7、1083番）

(42) 秋の夜を長みに可(カ)あらむなぞここば眠の寝らえぬもひとり寝ればか（巻15、3684番）

(43) 家人の斎へに可(カ)あらむ平けく舟出はしぬと親に申さね（巻20、4409番、大伴家持）

(44) むらきもの心砕けてかくばかり我が恋ふらくを知らず香(カ)あるらむ（巻4、720番、大伴家持）

(45) この夕柘のさ枝の流れ来ば梁は打たずて取らず香(カ)聞(モ)あらむ（巻3、386番、仙柘枝）

(46) 天の原富士の柴山木の暗の時ゆつりなば逢はず可(カ)母(モ)あらむ（巻14、3355番）

(47) 置目もや　淡海の置目　明日よりは　み山隠りて　見えず加(カ)母(モ)あらむ（古事記歌謡、112番）

私見によれば、類型Ⅰ～Ⅳのうちヤへの推移現象が最も顕著に認められるのはこのタイプである。表５は集中に見える述語分割型によるヤの例を同じく類似表現ごとに纏めたものである。

〈表５〉

類似表現		数
待ちヤ～	待ちヤかねてむ（4）	4
恋ひヤ～	恋ひヤ渡らむ（4）、恋ひヤ暮さむ、恋ひヤ明かさむ、恋ヤ籠れる	7
～ずヤ～む	寝ずヤなりなむ、着ずヤなりなむ、止まずヤ恋ひむ、逢はずヤわが恋ひ居らむ、寝ずヤ恋ひわたりなむ、為ずヤ別れむ	6
～寝ヤ～	旅寝ヤすらむ、浮寝ヤすべき	2
～ヤ行かむ	思ひヤ行かむ、	1
その他	置きヤ枯らさむ（2）、家ヤ居るべき（2）、立しヤ憚る、荒らしヤしてむ、行きヤ別れむ、照りヤ給はぬ、鳴きヤ汝が来る、乱れヤしなむ、哭のみヤ泣かむ、狭くヤなりぬる	12
合計		32

類型Ⅲのヤは32例とある程度纏った用例数が見えるが、このうち13例までが(48)「寝ずカなりなむ」→(49)「寝ずヤなりなむ」の如くカがそのままヤに交替する例、乃至は(50)「旅寝カモする」→(51)「旅寝ヤすらむ」、(52)「待ちカ恋ふらむ」→(53)「待ちヤかねてむ」等、カの類型表現を踏襲し表現を若干変更した例であることが明瞭である。

(48) 紫の名高の浦の砂地袖のみ触れて寝ず香(カ)なりなむ（巻7、1392番）

(49) かの児ろと寝ず屋(ヤ)なりなむはだすすき浦野の山に月片寄るも（巻14、3565番）

(50) …玉垂の　越智の大野の　朝露に　玉裳はひづち　夕霧に　衣は濡れて　草枕　旅寝鴨(カモ)する逢はぬ君故（巻2、194番、柿本人麻呂）

(51) 神風の伊勢の浜荻折り伏せて旅寝也(ヤ)すらむ荒き浜辺に（巻4、500番、碁檀越の妻）

(52) やすみししわご大君の大御舟待ち可(カ)恋ふらむ志賀の唐崎（巻2、152番、舎人吉年）

(53) かくだにも我は恋ひなむ玉梓の君が使ひを待ち也(ヤ)かねてむ（巻11、2548番）

文中の一点に位置する機能的必然性をほぼ喪失した述語分割型において、係助詞カが積極的にヤへと交替し始めるこのような様相は、カによる「係り結びの形式化[19]」とヤへの推移との関わりを窺わせる極めて示唆的な現象と見做される。上代では「～にかあ(る)らむ」「～にかあらまし」「～ずか(も)あ(る)らむ」等の連語的辞的成分への疑問助詞の介入例は、(39)～(47)をはじめカに僅か16例程（係助詞カの約７％）を数えるにすぎないが、中古に入ると、このうち「にかあらむ」の後継として現れる「にやあらむ」に類する形式が著しく勢力を拡大し、係り結びによる疑問文の４割程度を占めるまでに発達する。係り結びによる疑問文は、中古にかけて相関性と指示性の希薄化した類型Ⅲが勢力を拡張していくが、ヤはこのような環境下で積極的にカの位置へと侵入していく。

7　類型Ⅳにみるカの振る舞い

格成分と述語との間に疑問助詞が介入する類型Ⅳは、係助詞カが全体の約19％（244例中45例）に対し、係助詞ヤが全体の約34％（202例中68例）と、ヤの使用率の高さが目立つ。特に「主格＊述語」はカが約10％（244例中25例）に対し、ヤが約22％（202例中45例）とヤがカの倍以上の使用率を示す。表６は、係助詞カ・ヤの承ける主格体言をその種類により分類整理したものである。

〈表６〉

主語		か	数		や	数	
人	一人称代名詞	あれ、あのみ	2	10（40％）	われ（11）、われのみ（3）、われは（2）、あれ	17	30（67％）
	一人称としての普通名詞	正身	1		ますらを（4）、をのこ、男じもの	6	
	二人称	君	2		君	2	
	三人称	つま（2）、妹、奴、うつせみの人	5		つま、人、友、児ら、神	5	
動植物・自然物		虎、（沫）雪（3）、雲、山、波、玉、あらし、つむじ、黄金、盛り	12（48％）		猪鹿、萩、眞木の葉、松の葉、霜、海、山	7（16％）	
その他		目、ことば、月	3（12％）		千歳（3）、年は（2）、さ寝し夜、世の中、うつせみの世	8（18％）	
合計			25（100％）		合計	45（100％）	

この表によれば、カ・ヤが取り立てる主格体言には次のような異なる特徴が認められる。カは、人が10例（「主語＋カ―」の約40％）、動植物・自然物が12例（「主語＋カ―」の約48％）と同程度の使用状況であるのに対し、ヤは人が30例（「主語＋ヤ―」の約67％）、動植物・自然物が７例（「主語＋ヤ―」の約16％）と人名詞に著しい偏りを見せる。中でも一人称代名詞（乃至一人称としての普通名詞）を承けるヤは23例（「主語＋ヤ―」の約51％）に上り、カの３例（「主語＋カ―」の約４％）を大きく凌ぐ。

(54) 石上布留の神杉神びにし我八（あれヤ）さらさら恋にあひにける（巻 10、1927 番）

(55) 天地に少し至らぬますらをと思ひし我耶（あれヤ）男心もなき（巻 12、2875 番）

(56) 剣大刀身に佩き添ふるますらを也（ヤ）恋といふものを忍びかねてむ（巻 11、2635 番）

(57) 士也母（をのこヤモ）空しくあるべき万代に語り継ぐべき名は立てずして（巻 6、978 番、山上憶良）

(54) ～ (57) に見るように、自身の心的作用や心の在り様等を対象とする場合には原則カではなくヤが使用される[20]。カにも僅少ながら一人称代名詞（乃至一人称としての普通名詞）を承ける例が見えるが、それらはいずれも自明的事柄の生起する原因理由を推測する下記の例に限定されている。

(58) 夢にだになにかも見えぬ見ゆれども我鴨（あれカモ）迷ふ恋の繁きに（巻 11、2595 番）

(59) 白雲の　たなびく国の　青雲の　向伏す国の　天雲の　下なる人は　我（あ）のみ鴨（カモ）　君に恋ふらむ　我のみかも　君に恋ふれば　天地に言を足らはし　恋ふれかも　胸の病みたる…（巻 13、3329 番）

(60) 天皇の　遠の朝廷と　韓国に　渡る我が背は　家人の　斎ひ待たねか　正身可母（カモ）　過ちし

けむ　秋さらば　帰りまさむと　たらちねの　母に申して　時も過ぎ　月も経ぬれば　今日か来む　明日かも来むと　家人は　待ち恋ふらむに　遠の国　いまだも着かず　大和をも　遠く離りて　岩が根の　荒き島根に　宿りする君（巻15、3688番）

(58)「夢にだに～見えぬ」、(59)「胸の病みたる」、(60)「荒き島根に宿りする」等の体験的事態が、(58)「我かも迷ふ」、(59)「我のみかも君に恋ふらむ」を原因理由として生起するのか、(60)「正身かも過しけむ」「家人の斎ひ待たねか」のいずれに起因するのか等を疑問視する。一人称代名詞（乃至一人称としての普通名詞）を承ける例であっても、自明的事態が生起する原因理由がそもそも自身の心の有り様にあるのか否かを問題にするこのような例には、ヤの使用例は見えない。同様の事情は動植物・自然物等を主格体言とする例においても認められる。

（61）ぬばたまの夜さり来れば巻向の川音高しもあらし鴨（カモ）疾き（巻7、1101番、柿本人麻呂歌集）

（62）あしひきの山鴨（カモ）高き巻向の崖の小松にみ雪降り来る（巻10、2313番、柿本人麻呂歌集）

(61)「巻向の川音高し」、(62)「巻向の崖の小松にみ雪降り来る」はともに眼前の景のありのままの描写であるが、カはこの事態の生起する原因理由が（61)「あらしかも疾き」(62)「山かも高き」という事態に起因するか否かを問題としており、このような例にはやはりヤではなくカが使用されている。

類型Ⅳは同じ主格体言を承ける形式にあっても、類型Ⅲや類型Ⅱの一部に観察されるようなカからヤへの移行現象は認められない。「已然形＊―」等と同様に、カ・ヤの使い分けが一文全体の意味用法差の指標となるこのような環境下では、カからヤへの移行が疑問文全体の意味変化と連動するため、推移現象は生起しにくいものと推察される。

8　まとめ

以上、本稿では上代語における係助詞カの構文的振る舞いを観察するとともに、ヤへの推移現象と構文環境との関連についても言及した。

上代語における係助詞カは、係り結びとしての実質的構文意義に異なる段階性を認めるⅠ「句的成分＊述語」、Ⅱ「連用成分＊述語」、Ⅲ述語分割型、Ⅳ「格成分＊述語」の４種の統語環境下に現れる。このうち事態相互の相関に与る類型Ⅰや、疑問点に対する指示性の強い類型Ⅱの一部の形式（「時＊述語」「数詞＊述語」等）には、明らかにカへの偏在傾向が認められる。上代ではカとヤは未だ構文形式上の棲み分けを保持していると言えるが、カの領域へのヤの侵入は、カによる係り結びとしての実質的意義の希薄化した類型Ⅲを中心に現れ始める。このような移行現象は、万葉後期にかけて、相関力と指示性を保持するカのうち、ヤに空白域の表現形式にも拡大していくが、カに多用される表現形式であってもヤとの間に意味用法上の棲み分けがある表現形式下では、ヤへの交替が一文全体の意味変化をもたらすため推移現象はなお生起しにくい。このように、カの相関力や指示

性の強さは形式の上にも反映しており、同時に、ヤへの推移の様相からは、中古にかけて進む係助詞カの衰退が、カによる係り結びの質的転換に伴う係り結び的断続関係の形骸化と関連する現象であることが窺える。

〈注〉

注1　上代の疑問表現全体を見通した研究には、これまでに此島(1973)、山口(1990)、大野(1993)、阪倉(1993)、野村（1995、2001、2002)等が見られる。

注2　例えば、尾上(2002）は「「Ａ・係助詞・Ｂ」という文型における係助詞の意味的な働き方は、（甲）上接項Ａに対してある意味的な働きをする場合と、（乙）ＡＢの全体，すなわち文または句の全体をめぐってある意味的な働きをする場合」があるとし、「「や」は乙用法として了解される傾向が高く、「か」は疑問点指示の助詞と呼ばれるとおりそのほとんどすべての用例が甲用法である。」と述べる。

注3　その結果、係助詞カは中古に至ってα専用の助詞となり、βには専らヤが用いられるようになる。βにおいて、平安期以後のヤが上代のカに取って替わる要因には、ヤの柔い音感や情緒性への好尚（澤瀉［1941、178 頁］、佐伯［1963、50 頁］)、「対･聞き手性、問い掛け性の強さ」への求め（野村［2001］)、「流れるような調子を好む平安和歌」の性格との合致（阪倉［1993、184 頁］）等、主に表現上の動機についての指摘がある。

注4　上代の係助詞カ・ヤは意味上これを受ける文末の活用語を連体形で結ぶ句型を常態とするが、これから外れる句型も少なからず存する。本稿では前者（常態の係り結び）を考察対象とし、後者については稿を改めて論じる。上代の資料は『万葉集』（小学館日本古典文学全集)を用いる。この他『続日本紀宣命　校本・総索引』（吉川弘文館）『古事記歌謡』『日本書紀歌謡』『風土記歌謡』『仏足石歌』（以上、岩波日本古典文学大系）『歌経標式　注釈と研究』（櫻楓社）の字音表記例も併せて観察しているが、用例数が僅少であるため表の数には含めず、参考として適宜用例を掲げた。資料名の記載がないものは全て『万葉集』からの引用例である。

注5　但し（3）は「君は秋の夜の月かも」の倒置表現。音数律の制約に加え、「倒置によって詠嘆を深めている。」（『萬葉集釋注』伊藤博、1998年、集英社）と考えられる。

注6　但し、後者の立場も、一般に現代語訳は（1）「妹は珠であるのか。清浄な山地に蒔けば、散つて失せてしまつたことであるよ。」（『萬葉集評釋』窪田空穂、1984年、東京堂出版）の如く、前文と後文の独立性を強めた解釈が行われている。

注7　山内（2003）によれば、係助詞や疑問語を伴わない連体形終止文を含む二文構成の和歌は、上代では古事記に１例、万葉集に20余例が見え、それらは「連体形終止文は全て後文」に位

置し、「前文は強調表現である」（117頁）という共通点をもつという。

注8　例えば『日本語文法大辞典』（山口明穂・秋本守英編、2001年、明治書院）には「「か」は本来、述語構成的な陳述性の高い終助詞であり、そこから係助詞・副助詞へと用法を広げていった可能性が高い。」（【か】の項、野村剛史執筆）とある。

注9　野村(2002)は、このような諸例を「注釈句＋連体形の喚体句」の構造と捉え、カによる係り結びの成立起源（出発点）と位置づける。この種の構文の係り結びへの進展は、比較的注釈性の強い原因・理由句や主語等の成分から広がっていったと推定している。

注10「ものを」との組み合わせによる次の１例は、終助詞的用法のようにも見えるため、二句一文構造型の確例としては扱わなかった。

相思はずあるものを鴨（カモ）　菅の根のねもころごろに我が思へるらむ（巻12、3054番）

注11　山田(2008、209頁)。

注12『小学館古語大辞典』(中田祝夫他編、1983年、【み〔接尾〕】の項)。

注13　佐佐木(2003)は、上代では「［已然形＋や（／やも）］という結合はいかなる場合でも反語となる」が、［已然形＋か（／かも）］に「反語だと見るべき確例はない」と述べる。

注14　小路(1988)の調査による。

注15　管見によれば、集中の確定系の係助詞コソ・ゾ（集中にナムの例はない）が「已然形＋ば」に下接する例は皆無である。一方、無助詞の已然形やミ語法に下接する例はコソに25例、ゾに４例が観察される。

注16　堀尾(2009)で平安期から室町末期の49文献を調査した範囲では、疑問条件表現は「已然形＋ばカ―」１例、「已然形＋ばヤ―」３例の僅か４例が検出されるのみであった。

注17　柳田(1985)、山田(2005)。

注18　(35)(36)には、カとヤに意味機能の差を認める大野(1993)、差を明快に説明しきれないとする阪倉(1993)がある。前者は、他例より認知される差異を当該例に適用するが、作歌事情等形式外の要素を考慮しても明確な差異は認め難い。

注19　野村(2001)は、述語分割的な形式をカによる係り結びの「二次的な派生」と捉え、「係り部分「～～カ」が本来的に焦点を示すと見る限り、上代カにおいても係り結びの変質が始まっていることが、指摘されねばならない。」と述べる。

注20　木下（1978）は、(56）の如き「ヤ…ムを含む一人称主格の疑問文」は「腑甲斐ない自分の「現在」のあり方をじれったく思いつつそれをどうすることもできない、そのような内容の文型」と説く。

【参考文献】

大野晋(1993)『係り結びの研究』岩波書店

尾上圭介 (2002)「係助詞の二種」『国語と国文学』第 78 巻 8 号

木下正俊 (1978)「「斯くや嘆かむ」という語法」『万葉集研究　第 7 集』五味智英・小島憲之編、塙書房

小路一光 (1988)『万葉集助詞の研究』笠間書院

此島正年 (1973)『国語助詞の研究　助詞史素描』おうふう

澤瀉久孝 (1941)「「か」より「や」への推移」『萬葉の作品と時代』岩波書店

佐伯梅友 (1963)「萬葉集の助詞二種」『萬葉語研究』有朋堂

阪倉篤義 (1993)『日本語表現の流れ』岩波書店

佐佐木隆 (2003)『上代語構文論』武蔵野書院

野村剛史 (1995)「カによる係り結び試論」『国語国文』第 64 巻 9 号

野村剛史 (2001)「ヤによる係り結びの展開」『国語国文』第 70 巻 1 号

野村剛史 (2002)「連体形による係り結びの展開」『日本語学と言語教育』上田博人編、東京大学出版会

堀尾香代子 (2009)「古代語における疑問条件表現の変遷―ヤ・カの消長との関連から―」『解釈』第 55 巻第 11・12 号

森重敏 (1966)「「か」より「や」への推移續貂」『澤瀉博士喜寿記念　萬葉學論叢』澤瀉博士喜寿記念論文集刊行會

柳田征司(1985)『室町時代の国語』東京堂出版

山内洋一郎(2003)『活用と活用形の通時的研究』清文堂

山口堯二(1990)『日本語疑問表現通史』明治書院

山田潔(2008)『中世文法史論考』清文堂

山田昌裕 (2005)「疑問表現における主格表示「ガ」拡大の様相―係助詞「ヤ」「カ」との関わり―」『国語と国文学』第 82 巻第 11 号、東京大学国語国文学会